

# 難波西鶴と 海の道

【49】

森田 雅也

前回まで、西鶴の『日本永代蔵』元禄元(1688)年刊に登場する長崎商いの商人について書きました。

その商人の名は、博多の「金屋某」でした。ところが金屋という名は、『日本永代蔵』初版本の版元の一つなので、もっとも、こちらは京都の版元です。何か関係があるのか調査中ですが、福井藩の初期を支えた豪商の名も金屋です。金屋と西鶴の関係、何かありそうです。

うに思います。

さて、長崎と言えは、

右の話にも出て来た丸山遊郭について説明しなければなりません。『好色一代男』天和2(1682)年刊

巻八の四「都の姿人形」は、その副題に「長崎丸山の事」とあるように、丸山遊郭を舞台と

しています。

何度も書いたように、

『好色一代男』は主人公世之介が7歳から、女護ヶ島を目指して旅立って行く60歳までの一代記の体裁を取っています。その中で

も本章は、旅立つ前年の59歳の話です。

世之介が女護ヶ島に旅立つことは最終章まで明らかにされませんが、前章のこの話です

でに準備にとりかかる様子

が描かれています。

まず、世之介は、長崎商いに向かおうとする商人に、自分も後から長崎へ行くからと銀箱を預けます。

金額は不明ですが、1箱でも数千円ですから、かなりの覚悟と思えて、商人も「何か唐物(舶来品)御覧みあそばし候」

## 長崎・丸山遊郭での逸話

と尋ねますが、「日本物を買ふべきなげ銀」と答えます。

つまり、商人としては、これだけの金額を長崎へと言う以上は、世之介が投機的に、前

回まで述べてきた長崎商いに参入しようとしているのかと思つたわけですが、意外にも「日本物」を買つたための「なげ銀」と言つたのです。

「日本物」とは、丸山遊郭の日本人相手の女郎を指します。何と、丸山では、オランダ人相手の女郎と中国人相手の女郎と3種に分類されていたのです。さすが国際港長崎ですね。

一方、「なげ銀」というのは長崎商いに投機することを意味しており、世之介はわざと商人に商業用語を使い

ながら、丸山遊郭での豪遊をおしゃれに宣言したわけです。もちろん、商人も「さては丸山の御遊山ばかりの御心ざしありや」と気づき、「まなくあれにて待ちたてまつる」と世之介の先触れを約束します。

「六月十四日、けふは都の詠め残す月鉾のわたる時、我は玉鉾の商ひの道いそぐと先立ちぬ」。この日は、世之介の住む京都では祇園の山鉾巡行の日。商人もそれに軽妙に言葉を掛けて、いそいそと長崎商いへと向かいます。

世之介もいよいよ長崎に向かいますが、その前にすることがあります。それは次回に。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

# 「好色一代男」世之介